

近代詩研究瞥見

—宮沢賢治研究の流行—

長 野 隆

近代詩研究一年間（一九九〇年度）の収穫の中から何かを、という本誌の新指針に命じられるまま、反網羅的にこれを収束させるべく努めていると、おのずと表題（副題）のようなものが浮かんできた。とにかくどこを覗いても、宮沢賢治研究で埋め尽くされている感じを受けたし、そこにはまた、他の詩（人）研究には見られない異様な活況があった。むしろ、この「活況」は今に始まったことではないにせよ……例えば、安藤恭子氏の調査（『宮沢賢治最新参考文献目録』『国文学』'90・6、'91・6）によれば、この年（一九九〇年）に出た研究文献は、単行本一冊、雑誌特集号一〇冊、単行本所収論文一四篇、新聞・雑誌（特集号を除く）掲載論文八九篇ということ、他に賢治関係の機関誌・研究誌を加えると、二〇〇篇を優に超える論文やエッセイが量産されていたことになり、いささか危機的な状況と言えなくもない。ここまでくれば、（冗談ではなく）今後は是非とも◎△なりと、専門研究者としての矜持を添えてもらいたいもので、未見ならば未見と、それなりに対象を軽快に捌く手つきを見せて欲しい。

情報ネットワークの過敏で表面的な反応は、情報そのものの質に応じた自然淘汰の必要を妨げてはいしないか？ この種の苦い体験は誰しも覚えのあるところで、文学研究の宿命は百も承知した上で、

何やら提言しないではいられない。これでは反って文献が文献として機能しにくい……と、これは特に宮沢賢治研究にありがちな大きな陥穽のような気がして……が、余計な世話であった。それどころか、「それをやるのがお前の役目だ」と言下されそうである。

そこで一篇、いま触れた問題に関連して、銘記しておきたい論文がある。佐藤泰正「賢治文学の魅力」（『特集・宮沢賢治——新しい賢治像を求めて』『解釈と鑑賞』6）である。賢治研究の現今の「展望」をうかがうなら、これに尽きる、といって過言でない。

佐藤氏は言う——「私はここで敢て賢治童話の具体や細部にふれつつ、その「魅力」を語ろうとはしていない。その魅力や輝きをたえ、嘆賞することはたやすい。しかしその本質の由来するところを問わずして部分、細部をいうことは、菅谷氏というごくしばしば「ディレッタントイズムの集積にとどま」り、賢治という存在の「イノセンス（無償性）」を喰いつぶすたぐいのアマチュアリズム」に墮することにもなる。さらにいえばその安易な嘆賞は逆に対象自体を「縮小」することにもなる。菅谷氏はその精緻な分析の果てに童話はそれ自体、賢治「文学の限界であった」という。氏の論は賢治世界が真の「悲劇に到達しえず」、その物語が「ついに散文（小説）にゆきつかなかった」由来を説き、生の定立の基盤ともいふべき「時間」は「子供はなぜ大人になってしまふのか——という問いのただなかで、いわば絶対的に凍結してしまっている」という。さらには何が賢治の物語において「童話」的であるかと問えば、それは「同性的な親和という性的未成熟を人間の存在のイノセンスと

して絶対化したこと」であり、これは「童話」的本質ならぬ「個性としての宮沢賢治の人格的な本質に属すること」だともいう。／菅谷氏の論するところは賢治という存在の深部を衝いて鋭く、また深い。賢治に対するこの「異和」の「根源を解きあかしてくれる」論は「なきにひとしい」とさえいう。氏の『宮沢賢治序説』は凡百の賢治論に対して私の最も推服するところである。恐らくこの問うところをくぐらずして賢治の、賢治童話の本質に迫ることはできない——と。

佐藤氏はこのように、菅谷規矩雄の遺稿「宮沢賢治論——兄弟の物語」(『現代詩手帖』4)と、かの『宮沢賢治序説』(大和書房)に対峙することから始まり、更には吉本隆明『宮沢賢治』(筑摩書房)や別役実『イーハトーボゆき軽便鉄道』(リポレポート)にも言及して、実に端的に、鋭く、賢治研究の本質問題を炙り出している。菅谷氏の提示する「異和」の根源のなかに「信」をめぐる課題を読みとり、それを賢治における「信」と「修羅」の意識に絡め、「倫理」の場へと引き寄せたところで吉本論文を紹介し、「この「信」と「倫理」の合一が、さらには無名のもの、「生の原像」そのものの合一が賢治童話をつらぬくエロスであり、魂の顫動であったとすれば、いまひとつ、賢治童話の背後にうごめく影の部分、すなわち「賢治童話をつらぬくドラマツルギー」ともいべきものを探つたものとして別役論文を引き合わせ、最後に、以下のように結んでいる。——「最後に筆者自身の覚える「賢治童話の魅力」とは何か。それは倫理とエロス、あるいはアガペーとエロスとの無限

の交錯、また渾融であり、遺された課題は、菅谷氏が賢治童話の抗しがたい文学的魅力(エロス)思想的魅力(課題)への批判、異和をあえて二分化して論ぜんとした、その融和がいま遺稿序章に始まっていたとすれば、その「異和」の根をくぐって菅谷氏の目ざす「予望」の輝きに我々もまた新たに参加してゆくことであろう」。

私がここで敢えて佐藤氏の見識を持ち出すのは他でもない。殊に宮沢賢治研究にありがちな加熱した情熱の多くの中に、「解説」とは名ばかりに、「読み」を初めから拒否した「読み」の嬉々たる横行を認めないわけにはゆかぬからで、むしろ、かかる対象に対峙する文学的アプローチ(「研究方法」)の真に容易ならざる現実のゆえに、反って研究の場を世界市場のように開け放っている現状の無残・繁栄を、目に余るものとして受けとめるからだ。いや、目に余ることは余りに恥すべき妄言だとしても……思えば、研究文献への目配りはむろんのこと、根本の対象である文学現象にさえ端から関心をもたぬことが、どうして賢治研究の情熱たりうるのかという素朴な疑問を(或る学生の指導を通して)痛感した記憶が蘇る。しかもこれは、決して例外などではない宮沢賢治現象の一つに思えるのだ。

宮沢賢治を読む(「研究する」)ことが、ついにそれを読みおこせぬことの肯定すべき告白(「研究」と墮した現状の多くを、はたして、研究の活況と呼んで喜んでいれたいのだろうか。対象を透明にし、その構造や創造の原理を簡明に明かすことも、否、それこそが、文学の研究としての宮沢賢治論の、現在最も要請されている姿勢ではないかと思わずにはいられない。

—弘前大学助教授—